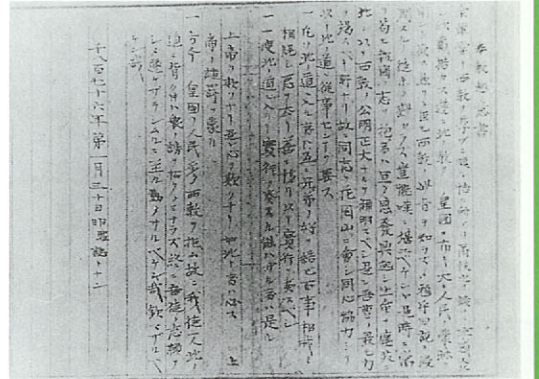


熊本バンドとは明治九年（一八七六）一月三十日（実は二十九日説もあって無視できません）熊本市の花岡山山頂で西教（キリスト教）を奉じ、この教えを日本全国に広めようと決意、結盟した青少年のグループのことです。この一団はその決意を「奉教趣意書」にあらわし署名しますが、その数三十五人。もともと山頂にのぼったものの署名しなかった人もいるようですし、署名の上に線を引いてある人もいます。（脱退の意思表示かどうかわかりません）。結盟後、新しく加わった小崎弘道（牧師・同志社社長）ら五人を含めて、数はふつう四十人といわれています。

署名した人のなかには、古荘三郎（実業家）不破唯次郎（牧師）藏原惟郭（代議士）金森通倫（牧師、政治家）辻豊吉（外交官）海老名喜三郎（弾正、同志社総長）下村孝太

熊本バンドの人びと 西教・決意・報國 光岡 明 (熊本近代文学館館長)



奉教趣意書

郎（実業家）紫藤章（同）徳富猪次郎（蘇峰）ジャーナリスト）森田久万人（同志社教授）伊勢時雄（横井小楠の長男、代議士）浮田和民（同志社、早稲田教授）市原盛宏（横浜市長）らがいます。

この結盟は熊本にたいへんなショックを与えました。キリスト教禁制は明治六年にとけてはいましたが、明治維新国家の近代化の歩みのなかで、前々回の神風連、前回の実業党各編でも書きましたように、熊本は学校党の守旧派とのからみで、思想的にも社会的にも鋭い対立緊張のなかにあったのです。そこへキリスト教の登場です。署名者のなかには母親から短刀を渡され、自決を迫られた人もいるくらいでした。

種子をまいたのは明治四年八月、熊本洋学校教授として来熊したL・L・ジェーンズです。当時、熊本藩庁は横井



花岡山・熊本バンドの碑

小楠の思想を受けついで実業党政権ですから、熊本洋学校に期待されたのも、いわゆる「西洋器械ノ術」としての実学的洋学であり、道徳教育面は従来の儒学朱子学を基本方針としていました。生徒たちもまた儒学的教養はじゅうぶんに持っていました。しかし儒学の「格物致知」（事物に本来備わる理にきわめ至ること）の精神は、洋学の科学的合理的精神と共通するものがあつたのです。この合理精神が生徒たちの自然観、社会観、人間観にも影響を与えました。

ジェーンズは後年、生徒たちによって「剛毅」「真摯」「性情濃厚」と回想されていますように、人格的影響力がきわめて大きかったと思われまふ。最初ジェーンズはキリスト教を直接教えることはしませんでした。生徒らの英語の語学力が上がってきた明治七年のはじめから、自

宅で聖書の講読をはじめたようです。残された書簡によれば、ジェーンズは「すべての事業を神の導きに任せ、ここに基督の王国を建設」することを、つとに決心していました。

若い時期に新しい思想にふれるということは、たいへんなことです。明治八年から九年にかけて、洋学校にキリスト教奉教の焰が燃え上がりました。実際「烈火のごとくなり、授業もできなくなつた」という金森通倫の回想があります。これが明治九年一月の結盟につながっていくのです。

しかし、儒学的教養を持っていた生徒たちには、キリストの奇蹟とか、十字架上のキリスト、つまり原罪の贖罪とか、神の国といった終末観など、キリスト教のもつとも根本にあるものの理解、信仰がどうしてもなじみませんでした。これ



浮田 和民



森田久万人



不破唯次郎



ジェーンズ

は小崎弘道の回想などに出てきます。

それは「奉教趣意書」の文言を読めばよくわかります。趣意書のなかに「此ノ教ヲ、皇国ニ布キ 大ニ人民ノ蒙昧ヲ開ント欲ス」とあります。蒙昧とは知識が低く道理に暗いことです。バンドの人たちにとってはキリストの再臨も最後の審判もなく、熱烈ですがごく単純な神の国へのあこがれであり、蒙昧を開くのは人民を愛するが故であり、人民を愛することはそのまま国にむくいることであつたのです。

私たちは明治維新国家が、近代民族国家として歩みはじめた時代のことだ、ということ銘記しなくてはなりません。強烈なナショナリズムがその底にありました。趣意書が掲げている「凡ソ此ノ道ニ入ル者ハ 互ニ兄弟ノ好ヲ結ビ百事相戒メ相規シ 悪ヲ去リ善ニ移

リ 以テ実行ヲ奏スベシ」など三カ条の決意が、キリスト教と関係なく一般道徳になつていふことも、キリスト教的「神の国」と民族国家というもともと矛盾するものを重ね合わせたからに外なりません。

後世の宗教的、思想的批判はあるにしても、当時の近代化の過程においては、明らかな進歩思想であり、かつキリスト教という新しい人間観に無批判に心酔したのではなく、民族としての誇りや士族、エリートとしての自覚のもとに結盟したことを覚えておかななくてはなりません。

若い思想というものは、行動をとまなないながら、こういった動きをするものだと思います。私は「治國平天下宗教」と要約した池田朔風（九州新聞「熊本洋学校」のことばは名言だと思っております）

